


 巻頭言

## トビイロウンカの発生予察に携わった頃

 一般社団法人 九州病害虫防除推進協議会 やま  
山 なか  
中 まさ  
正 ひろ  
博


九州地域以外の方には「九州病害虫防除推進協議会(以下、九防協)」と聞いてもピンとこない方も多いかと思うので、簡単にご紹介いたします。九防協は1970年に創立され(2010年に法人格を取得)、九州農政局、農薬工業会の会員や九州に所在するJAの8組織のご支援、ご協力を得て病害虫防除に関する様々な事業を行っていますが、最も重要な事業は病害虫防除技術向上のための農薬連絡試験です。具体的には普通作物、野菜(花き類を含む)、果樹、茶の各作物において農研機構や九州7県の試験研究機関で検討を積み重ねた試験設計に基づき、新旧農薬(天敵などを含む)の防除効果試験を原則2か年かつ2場所以上で実施し、その結果を基に農家の皆さんに活用していただける最も効果的な使用法をスピーカーに確立することを目指しています。

さて、昨2020年は春から日本中が新型コロナ問題一色といっても過言ではない状況で、日常生活もままならない中、果樹カメムシ類やトビイロウンカ等が多発したことで、病害虫防除に携わる皆さん方は調査研究や対策会議、防除資材の普及活動等で大変ご苦労されたことと思います。特にトビイロウンカについては九防協の農薬連絡試験課題の一つでもあり、初飛来の時期から発生状況に注目してきました。2020年には注意報が24府県から延べ30件、警報が11府県から発出され、2年続けての多発生となったことから、今後はトビイロウンカ多発年の頻度が高まることを想定した対策が必要かと思えます。

私は福岡県職員時代に普通作物害虫担当として1979年から12年間、県予察員も兼ねてトビイロウンカの研究業務に携わった経験があるので、当時の体験談を少しお話しします。

予察灯やネットトラップによる飛来波の確認からその年のトビイロウンカの発生予察が始まるのは今も昔も変わりません。ただ困ったことに設置場所が悪かったのか、試験場内の予察田では飛来成虫が確認されるのにトラップ類では捕獲されないことも多く、飛来波の把握には毎年苦労しました。そこで飛来が予想される日(当時は「九州北部に梅雨前線がかかり、前線に向かって吹く南西風に乗って飛来する」と言われていました)に予察田で成虫数調査を行うようにしたところ、飛来波ごとの成虫数が把握でき、普及員からの「農家はまず最多飛来波を対象に防除するので、どれが最多飛来波?」との質問にも自信を持って回答できるようになりました。ま

た、成虫数調査では思わぬ“副産物”も得られました。移植時期の異なる3水田で3年間調査したところ、移植時期の早い水田ほどトビイロウンカの飛来成虫数が多く、次世代の短翅雌率は高く、その結果、成幼虫密度も高く推移し、坪枯れ面積率も高くなる結果が得られました。巡回調査に5月下旬植水田を含めると坪枯れ発生の危険度を早めに予測できるので、防除対策資料によく活用したものです。現在では日本植物防疫協会が運営する「JPP-NET」の「ウンカのリアルタイム飛来予測システム」で高精度に飛来時期・地域の予測が可能になり、予察技術の進歩には隔世の感を覚えます。さらにAIを活用したイネウンカ類の種類別計測の研究が現在進行中とのことで、近い将来、時間と労力を要する水田内での個体数調査もかなり省力化できるのではないかと期待しています。

発生予察に携わった当初、トビイロウンカの防除はBPMC粉剤やMTMC粉剤等の比較的防除適期幅の狭い薬剤散布が主流だったので、普及員からは日単位での防除適期を求められる厳しい時代でもありました。その後、比較的防除適期幅の広いプロフェジン剤やイミダクロプリドを含有する残効の長い育苗箱施薬剤が登場し、本田期防除はこれ1剤だけで、あるいは本田期防除はもう不要では、とまでいわれる時期がありました。しかしながら、両剤については既に薬剤感受性低下が指摘されており、近年のトビイロウンカ多発の主要因の一つにもあげられています。

最近、新規開発剤トリフルメゾピリムを含む育苗箱施薬剤が上市され、九防協でもトビイロウンカが多発したここ2か年、九州6県の試験研究機関で移植日から3~4か月間の長期調査を行う延べ24件の農薬連絡試験を実施しました。詳細は省きますが、いずれの試験でも長期間、低密度に抑える好成绩が得られ、今後の普及拡大が期待されています。しかしながら、いかに優れた殺虫剤であっても薬剤感受性低下対策は避けて通れない課題です。トビイロウンカの性質上、国内のみの対策では不十分なので、飛来源と推定される国と連携した薬剤感受性検定、発生実態等の調査研究や情報交換がより一層重要になると考えています。

最後になりますが、一刻も早く新型コロナ感染症が終息に向かい、私たちが不安なく業務に専念できる日々が戻ってくることを切に願うものです。